

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2243 号

Radio-sensitization using hydrogen peroxide in patients with uterine cancer

子宮頸がんに対するオキシドールを用いた化学放射線治療

胡 蓉 (こ よう)

博士 (医学)

論文内容の要旨

腫瘍の低酸素状態は、放射線療法および多くの化学療法において治療効果を減弱させ、腫瘍の増悪、腫瘍血管の血管新生、転移などにも関わっていることが知られている。近年、過酸化水素（オキシドール）による放射線増感作用が報告されている。表在性腫瘍、乳癌、肝臓癌に対して、この療法の安全性及び有効性が報告されているが、子宮頸癌に対する報告まだない。子宮頸癌は全世界の女性死因の第 4 位に位置している。進行子宮頸癌の標準療法は、同時化学放射線療法 (CCRT) に腔内照射を加えるものである。ただし、腔内照射を有する施設が少なく通院治療が困難な場合があり、また、股関節の疾患や他の合併症のため腔内照射が行えない症例や早期でも手術できないものも存在する。これらの状況を踏まえ、子宮頸癌に対するオキシドールによる放射線増感作用の安全性及び有効性を検討した。患者の選択基準は：根治的目的の CCRT を予定の子宮頸癌患者とした。腔内照射不能また拒否、20 歳以上、血行性遠隔転移なし、PS は 2 までで、病理分類に、制限を設けなかった。照射方法は、全骨盤に 1.8Gy*25 回を照射し、リンパ節転移のある場合は、転移リンパ節に 2Gy*5 回を追加照射した。介入は、週 2 回オキシドールに浸したガーゼを腔内に挿入した。挿入は照射直前に行い、照射終了後すぐ抜去した。2014/2-2019/8、合計 20 名の患者が研究に参加した。1 例は全身状態の悪化が原因で早期に治療を中断した。また、1 例は途中で腔内照射を行う方針に変更となったため、評価可能な症例数は 18 となった。Tis の症例を除く、17 例の中、FIGO stage I/II の 1 年、2 年全生存率は両方とも 90%、FIGO stage III/IV の 1 年、2 年全生存率は両方とも 86%であった。腫瘍の最大径が 50mm 以下の症例はより高い奏効率を示した。急性期有害事象は G3 以上のものは認められず、CCRT 終了後 6 カ月経過した 15 例の症例を対象に晩期有害事象を評価したが、明らかな晩期有害事象を認められなかった。本研究ではオキシドール併用 CCRT は高い奏効率を示し、また、重篤な有害事象は認められなかった。しかし、経過観察と症例の蓄積、慎重な患者選別の必要があると考えられた。